



思い出

てすん@砲雷ね-15

「オリヴィア、今日はロンドンに行こうか」

冬のある日。アフタヌーンティの時間に、ウィリアムは告げた。

クリスマスも近い。学校に通うことのないオリヴィアにとって、仕事以外での外出はほとんどないに等しかった。情報部の殺し屋なんてやらされてるから、もちろん同世代の友達もいない。友達といえば、初仕事の時に買ひ与えた「GoGoちゃん」のぬいぐるみ「ニコラ」くらいのもんだ。——ただし、あれ以来増え続けているが——

以前仕事でウェストミンスターの近くへ行った際、川と橋を挟んで向こう側が水族館になっているのをウィリアムは気付いた。養娘の情操教育の足しにもなるだろうし、不安定になりがちな心を落ち着けるきっかけにもなるかもしれない。ウィリアムはそう思い、誘ったのであった。

「いいよ」

最近では、任務以外の時でかつ「職員」のいない場でのみ、オリヴィアは笑顔を向けてくれるようになった。関係は良好になりつつある。ウィリアムは、幼い少女を殺し屋として育てなければならぬ罪を、彼女への愛情によつて贖罪しようとしていた。大人の彼ですらそれが必要で、まだ10歳のオリヴィアがどんな重荷を背負わされているのか……考えるだけで悪寒が止まらなくなる。

自分はずくづく、こんな仕事に向いていないと思った。

だが、今更やらないわけにもいかない。情報部から入る報酬で、ヴァンキツシユ家の資産とは名ばかりの負債の維持と、使用人たちへの給料が払えるのだ。

没落したものだ。ヴァンキツシユ(征服者)の名が聞いてられる。

そんな情けなさは自覚している。しかし、それとオリヴィアの幸せとは関連してはいけなかった。彼女は、報われるべきだとウィリアムは強く思う。

初めて見る水族館は、オリヴィアにとって何もかもが新鮮で、まるでおとぎの世界だった。見たこともない色とりどりの魚が、自由に泳いでいる。もつとも、限られた環境での謳歌ではあったが。

オリヴィアは、水槽の前に来るたびに魚の名前を尋ねた。水槽のそばにある説明書を読んで聞かせる。ウィリアムも魚に詳しいわけではない。なので、オリヴィアと共に学んでいるかのようなつもりで、一緒に楽しんだ。特にオリヴィアが食い入るように眺めていたのは、クラゲの水槽だった。見たところ、クラゲには脳がない。しかし、植物でもない。動いている。ゆらゆら揺れている。その光景がとても不思議で、少女は養父を質問攻めにした。可能な限り彼は答え

だが、答えられないものもあった。

「なぜクラゲは脳がないの？ 何も考えないの？」

流石に、クラゲの気持ちや考えなんてわかるはずもなかった。もしかしたら、クラゲには我々には思いもよらない思考を持っているかもしれない。あるいは何も考えてないのかもしれない。そんな答えにオリヴィアは不満そうだったが、

「私たち人間同士でも、相手のことは分からないものさ。だから、『どうせこうだろう』と決めつけてしまうことだけは避けたほうがいいかもね」

「確かに、お養父様は私の嫌いなものを食べさせたがるわ。嫌なのに」

オリヴィアはピーマンを受け付けようとしなかった。

「だって、ピーマンに罪はないだろう？」

「苦いことが既に罪だわ。重罪だわ。あんなに美味しくないんだもの、きつと人生には不要なものなのよ」

見ているテレビのせいなのか。口がどんどん達者になっていく。ウィリアムは苦笑するしかなかった。

やがて夕方になり、二人はテムズ川のほとりに出た。向こう側に、ビッグベンとウェストミンスター宮殿が見える。時には、議員を標的にすることもある。その時にはここらへんが二人にとっての「仕事場」になった。しかし今は任

務とは関係ない。だから、オリヴィアを側に背を向けて座らせる。

「さ、オリヴィア。笑って」

その言葉に、素直に笑顔を見せてくれる。ウィリアムは、この笑顔をずっと守りたいと思う。そして、守れるのは自分しかないこともわかっていた。

思い出

発行日 2019年10月2日

著者 てすん@砲雷ね-15
<https://www.pixiv.net/member.php?id=3669242>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
